

知ってる？

# 城陽の宝もの

～次代に残そうふるさとの自然～



## —はじめに—

京都府南部(伏見以南)は、琵琶湖から流れ出る宇治川と三重県から流れてくる木津川を本流河川とし、この2つの川に流れ込む数多くの支川や水路があります。木津川と宇治川は淀付近で桂川に合流し、淀川となって大阪湾に流れ込みます。

京都府南部では、琵琶湖の魚や大阪湾から遡上した魚、溪流の魚、人里の魚、人により持ち込まれた魚など様々な魚が見つかり、現在でも50種類を超える魚類が確認できます。

城陽市は、木津川と東から木津川に流れ込む青谷川、市内中心部を流れ、巨椋池の干拓田を通過し宇治川に流れ込む古川などの支川があります。青谷川は綺麗な川ですが、濁水することが多く、魚種は多くありません。城陽市付近の木津川は砂質で、水量が常にあるため、カワムツ、オイカワ、カマツカが多数見られます。古川は近年おこなわれた河川改修の結果、水質が改善され多数の魚が見られます。

このガイドブックでは、城陽市で確認できた魚を掲載しています。魚を見つけたら、ここに掲載している魚と比べて見てください。新たな発見があるかもしれません。

## カネヒラ (コイ科)

城陽市での俗称 オオキンタ

体長 10 cm

京都府RDB:絶滅危惧種



体長は10cmを超える大型のタナゴの仲間です。タナゴの仲間は、二枚貝に卵を産み付けます。このため、二枚貝がなくなるといなくなります。以前は、本種をはじめシロヒレタビラやイチモンジタナゴ、ヤリタナゴなどを見かけましたが、現在ではほとんど見かけません。城陽市では本種はまだ見られますが(菟道高校生,2022)、他の地域では外来種のタイリクバラタナゴばかりになってしまいました。



## イタセンパラ (コイ科)

体長 10 cm

京都府RDB:絶滅寸前種



外来魚のような名前ですが、漢字では「板鮮腹」と書き、れっきとした在来魚です。平たいタナゴの仲間で、雄のお腹はきれいな赤紫色になります。巨椋池にたくさんいたようですが(宮地,1962)、開発や外来魚の影響で減少し、1974年に国の天然記念物に指定されています。2000年代には木津川で天然個体が確認されています(中川,未発表)。その後、2010年代に入り飼育個体の放流や生息場所の改善が行われています。



## タイリクバラタナゴ (コイ科)

体長 8 cm

京都府RDB:外来種



大きいもので体長8cm。宇治川や木津川で見かけるタナゴのほとんどが本種です。本来、京都府南部には、亜種関係のニホンバラタナゴがいました。そこに、タイリクバラタナゴが持ち込まれ、交雑が進んでしまったようです。現在では、純粋なニホンバラタナゴはいなくなったようです。



## ムギツク (コイ科)

体長 10 cm

京都府RDB:未掲載種



体長10cm程度の、細長いコイ科の魚で、口は小さく、口ひげを持ちます。小型の個体には、尾ビレの付け根から口先まで黒い線が体側に入ります。大阪教育大学長田教授(現:名誉教授)が、ムギツクは他種類の魚に自分の卵の世話をしてもらうという面白い行動を研究会で報告しました。いまでは、一般的知見となっているムギツクの托卵ですが、当時、研究会で盛んに質疑と議論が起こりました。



## カワバタモロコ (コイ科)

体長 5 cm

京都府RDB:絶滅寸前種



口が上向きで、口ひげはなく、ミナメダカよりも一回り大きな魚です。体側に青緑色の縦線が入ります。以前は、水草の繁茂する池で見つかりましたが、現在では、見かけなくなりました。2020年に種の保護法で保護される魚に指定されています。開発により、ため池に水草がなくなり、外来魚の侵入により激減しています。京都府南部では2009年に南山城村のため池でカワバタモロコを発見し、2020年まで確認しています(林・中川,2022)。



## カマツカ (コイ科)

体長 20 cm

京都府RDB:未掲載種



口ひげがあり、口先が長く横から見るとやや反り返っており、ユーモラスな顔をしています。比較的大きくなり、体長20 cm を超える個体も見られます。砂地に隠れており、川の中を歩き回ると飛び出してきました。京都府南部には、カマツカとナガレカマツカが見られます(林・中川,2022)。城陽市や木津川で見られるのは、カマツカばかりです。



## ナガレカマツカ (コイ科)

体長 15~20cm

京都府RDB:未掲載種



カマツカ類は、2019 年にカマツカ、ナガレカマツカ、スナゴカマツカの3種に細分されました。分類を行った富永教諭は京都府南部にゆかりがあり、学生の時、京都府南部の水路で採集したカマツカ類がきっかけとなり研究されました。ナガレカマツカは、口ひげが長く、体側に見られる鞍上の模様ははっきりしています。京都府南部では、ナガレカマツカは支川に局所的に分布しています。



## コウライニゴイ (コイ科)

体長 50cm前後

京都府RDB:未掲載種



ニゴイとコウライニゴイは外部形態では見分けが付きにくく、エラの内側の櫛状の突起を調べます。エラの外側は呼吸器官ですが、内側は食べ物をこしとりやすいように櫛状になっています。このエラ櫛状のものを鰓耙(さいは)といいます。コウライニゴイは鰓耙が多く18本以上です。近年、宇治市と城陽市の水路で採集した個体の鰓耙数は18以上でした(林,未発表)。



## ズナガニコイ (コイ科)

体長 20 cm  
京都府RDB:絶滅危惧種



体長20cmほど。顔つきや体形はニゴイ類に似ていますが、体側に、きれいに並んだ斑点が見られます。京都府南部でも見かけましたが、現在は見かけません。砂地で流れの速い河川で見つかりますので、木津川には生息しているかもしれません。



## タモロコ (コイ科)

城陽市での俗称 ギンモロコ

体長 10 cm  
京都府RDB:未掲載種



京都府南部の水路で最も普通に見られる魚のひとつです。体長10cm程度の小さな魚で、体色は銀色、体側に黒い縦帯が入ります。短い口ひげをもち、近縁種のホンモロコとよく似ています。ホンモロコは美味しくスーパーで売られていますが、タモロコは美味しくありません。



## ヒガイ類 (コイ科)

体長 10cm  
京都府RDB:絶滅危惧種



ヒガイ類は明治天皇が好まれたことから鯉の漢字を当てます。京都府南部の河川でも、1980年頃は見かけましたが、激減し、現在では、断続的な採集情報のみです。体形は、タモロコに似ていますが、体側にまだらな斑紋が見られ、大きな個体では背ビレに模様が入ります。京都府南部にはカワヒガイがいたとされますが、現在断続的に採集されるのは、琵琶湖から流下したビワヒガイかもしれません。



## スゴモロコ属 (コイ科)

体長 7 cm  
京都府RDB:未掲載種



口ひげの長さや体高で分類されますが、スゴモロコ属の各種は酷似します。スゴモロコとコウライモロコについては、1個体では同定できず、複数個体の特徴を調べる必要があります(牧,1998)。1990年代和歌山大学牧名誉教授が京都府南部のスゴモロコ属を調べた時にはコウライモロコと同定されました(私信)。現在、かなり減少しており、採集できる個体が少なく正確な同定ができていません(林・中川,2022)。



## ワタカ (コイ科)

体長 20 cm

京都府RDB:要注目種



体長 20 cm を超える、流線型の魚です。琵琶湖淀川水系固有の魚です。30年前は三川合流付近で見かけましたが、現在では見かけません。現在、京都府南部では、従来見られた魚類の復活を目的とし、わんどの増設や河川改修が行われています。ワタカは琵琶湖にいますので、今後、環境の改善により復活が望まれます。



## ヨドゼゼラ (コイ科)

体長 5 cm

京都府RDB:準絶滅危惧種



近年、ゼゼラとヨドゼゼラに細分されました(川瀬ほか,2010)。京都府南部から大阪にかけての生息状況が詳細に調べられています(川瀬ほか,2012)。両種とも体長5cm程度の底生魚で、両種とも口ひげはありません。側線鱗数が少なく34か35で、体高が高ければヨドゼゼラです。1年で産卵して死亡する年魚のようで、成魚は繁殖期前の春先にしか採集できません。

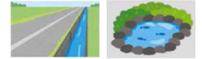


## モツゴ (コイ科)

城陽市での俗称 タモロコ

体長 8 cm

京都府RDB:未掲載種



池や水路で見られる体長8cmほどの小さな魚です。タモロコに似ていますが、受け口で口ひげがありません。関東では「くちぼそ」と呼ばれ、京都府南部でも「くちぼそ」と呼ぶことがあるようです。しかし、お年寄りに聞くと京都府南部で「くちぼそ」は、同じコイ科のムギツクのことを指していたようです。



## アブラハヤ (コイ科)

体長 13 cm

京都府RDB:絶滅寸前種



タカハヤに酷似します。アブラハヤは、尾ビレの付け根に黒い模様があること、体側にはっきりとした黒い縦帯が見られることで見分けることができますが、春先に採集した小型の個体は全く区別が付きません。同定するためには鱗の数を調べます。タカハヤもアブラハヤも、大きな個体では口先がへら状にのび、ユーモラスな顔つきになります。関東にはたくさんいるようですが、関西では稀です。近隣では、宇治川の支川で稀に見つかります(林,未発表)。



## タカハヤ (コイ科)

体長 10 cm  
京都府RDB:未掲載種



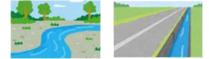
体長10cm程度、体形はカワムツに似ていますが、鱗が小さく、尻ビレが大きくありません。体側に細かい黒点もあり、すぐに見分けがつかず、宇治川の支川の上流では比較的好く見られます。木津川の支川の上流部にもいますが、数は少ないです。春には、体側にはっきりした黒い縦帯が見られます。ヤマメやアマゴといった溪流魚と一緒に釣られることがありますが、味は美味しくなく、食用にはされないようです。



## オイカワ (コイ科)

城陽市での俗称 ハイジャコ

体長 10 cm  
京都府RDB:未掲載種



尻ビレが大きく、小型の個体はカワムツ類とそっくりです。清流からやや汚れた水域まで幅広く見られます。体長10cmを超える夏の雄は、婚姻色が現れ、はっきりとした横帯が見られます。小型のものや雌でも、横帯がうっすらと見られます。京都府南部の冬のオイカワは「寒バエ」と呼ばれ、美味しく、釣りの対象になります。



## カワムツ (コイ科)

城陽市での俗称 ハイジャコ

体長 10~15 cm  
京都府RDB:未掲載種



カワムツは、尻ビレが大きい、魚らしい形をしたコイ科の魚で、体側に縦帯が見られます。カワムツ類は、2000年頃に、カワムツとヌマムツに細分されました。本種は、胸ビレと腹ビレの前縁が黄色くなることで見分けがつかず、京都府南部では、支川から本流河川まで幅広い場所でもっとも普通に見られます。城陽市では、オイカワとカワムツの区別をせずどちらもハイジャコと呼んでいます。



## ヌマムツ (コイ科)

体長 13 cm  
京都府RDB:準絶滅危惧種

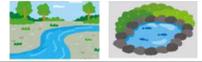


カワムツとそっくりで、体側に縦帯が見られます。本種は、胸ビレと腹ビレの前縁が赤くなることで見分けができます。ヌマムツは、京田辺市や木津川市の池に多く、木津川でも見かけます。たまに、古川でも見られます。池や緩やかな流れの場所を好むようで、オオクチバスなどの外来魚の格好の餌になっているようです。



## ハス (コイ科)

体長 30 cm  
京都府RDB:要注目種



オイカワによく似た、コイ科の肉食魚で、口が大きく横から見るとへ字型をしています。体長は30cmに達し、京都府南部ではクタバスと呼びます。昔は、結構見かけましたが、最近全く見なくなりました。近年、和束川の河口で釣り人が釣りあげたのを見せてもらっただけです(林・中川,2022)。琵琶湖にはたくさんいるようで、煮つけや塩焼きが売られています。



## ギンブナ (コイ科)

体長 15~20 cm  
京都府RDB:未掲載種



平べったくて、口ひげがなく、体側に赤や青色の縦帯がなければフナ類です。フナ類も同定が難しく、鰓耙(さいは)と呼ばれるエラの内側の櫛状の構造物と体高を調べます。京都府南部にはギンブナとゲンゴロウブナが見られます。琵琶湖で耐ずしの材料になるニゴロブナも見つかるとはかもしれません。ギンブナの鰓耙の数は60以下であり、宇治市や城陽市の水路で見られるフナ類はギンブナばかりです(林,未発表)。

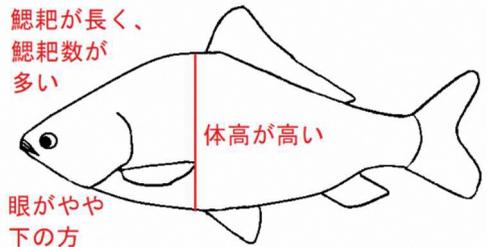


## ゲンゴロウブナ (コイ科) 城陽市での俗称 ヘラ(ブナ)

体長 30 cm  
京都府RDB:未掲載種



ゲンゴロウブナは鰓耙(さいは)の数が90を超えます。ゲンゴロウブナも体高の高いフナですが、木津川のゲンゴロウブナは特に体高が高く、釣り用に品種改良されたものだと思います。釣り堀で釣りの対象になり、ギンブナを「まぶな」、ゲンゴロウブナの改良品種を「へらぶな」と呼びます。



## コイ(型不明) (コイ科)

体長 60 cm前後  
京都府RDB:未掲載種



コイには、体形の細いものと体形の太いものと2型があります。琵琶湖にいる体形の細いコイは、在来種とされ「絶滅のおそれのある地域個体群(LP)」に指定されています。太いタイプは、小型の場合、どちらかというとなりに似ていますが、ひげがあります。京都府南部の個体は、ほとんどが太いタイプのようなのですが、詳細は分かりません。

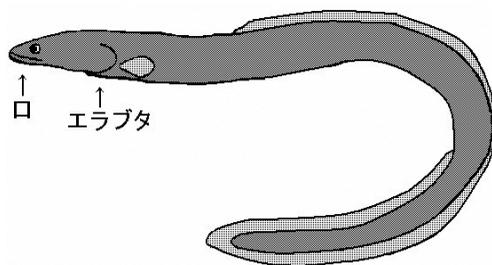


## ニホンウナギ (ウナギ科)

体長 50 cm  
京都府 RDB:未掲載種



タウナギと異なり、胸ビレがあります。最近めっきり少なくなったウナギですが、養殖は明治時代から行われていたようです。ただし、卵から増やすのではなく、海の近くで捕まえたウナギの幼魚を河川に放流していました。卵を産ませ、その卵から親まで成長させる完全養殖は、2010年に達成されました。幼魚の放流は京都府南部でも行われており、たまに捕まえられるようですが、水産業的に有用な魚であり許可なく持って帰ってはだめです。



## アユ (アユ科)

体長 10 cm  
京都府 RDB:未掲載種



アユは、マスのような形をし、背ビレの後ろに小さな脂ビレがあります。近隣には、一生をダム等で過ごす陸封アユ、放流されたアユ、天然のアユの存在が知られています。水質が改善されているため、宇治川・木津川だけでなく、天井川ではない支川でも見られるようになりました。アユも、水産業的に有用な魚であり、許可なく持って帰ってはだめです。



## アマゴ(放流) (サケ科)

体長 20~30 cm  
京都府 RDB:未掲載種



清流に住むサケ科の魚で、脂ビレをもち、体側に青い小判型の模様が多数並び、赤色の点が散在する美しい魚です。近縁種のヤマメには体側に朱点がありません。京都府北部はヤマメの、京都府南部はアマゴの生息域とされています。美味しく、釣りの対象として、春先に盛んに放流されています。



## ミナメダカ (メダカ科)

城陽市での俗称 コメンジャコ

体長 3 cm  
京都府 RDB:絶滅危惧種



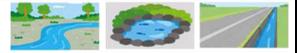
現在、メダカ類は、東北地方に多いキタノメダカと西日本に多いミナメダカの2種に分類されます。ミナメダカの特徴は、尾ビレの付け根に黒い斑紋が現れるところです。木津川では、多くのミナメダカが見つかります。ただし、群れの中に、オレンジ色をした園芸品種を見かけることがあり、野生個体との交雑が起こっているようです。



## ドジョウ在来 (ドジョウ科)

体長 10 cm

京都府RDB:未掲載種



童謡にも歌われなじみの深いドジョウですが、全国的には減少しているようで、2018年に準絶滅危惧(NT:環境省)に指定されました。古川や巨椋池の干拓田の水路では多数のドジョウを捕まえることができます。大阪府では、2001年以降、在来のドジョウが減り、中国産のドジョウにとって代わられているようです(松井・中島,2019)。2022年、城陽市の古川で見つかるドジョウについて、菟道高校生が詳細に調べたところ、すべて中国産のドジョウでした。



## オオシマドジョウ (ドジョウ科)

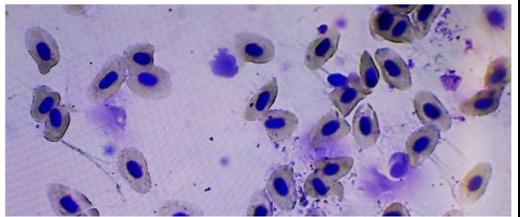
城陽市での俗称 イシドジョウ

体長 10 cm

京都府RDB:未掲載種



水のきれいな砂質の場所で見られます。体形はドジョウですが、白地で、斑点列の斑紋が体側に入ります。シマドジョウ類は、二倍体と四倍体が存在し、同定には、赤血球の核の大きさを調べる必要があります。木津川の東部(三重県)ではニシシマドジョウが見られますが、城陽市付近で見つかる個体はオオシマドジョウです(林,未発表)。



(オオシマドジョウの赤血球)

## ニシシマドジョウ (ドジョウ科)

城陽市での俗称 イシドジョウ

体長 10 cm

京都府RDB:未掲載種



きれいな水の砂地で見られます。オオシマドジョウとニシシマドジョウの外部形態は酷似します。両種は染色体の数が異なりニシシマドジョウは二倍体、オオシマドジョウは四倍体です。このため、赤血球の核の大きさが異なります。城陽市付近では、オオシマドジョウばかりですが、木津川上流の三重県ではニシシマドジョウが確認されています(赤松ほか,2018)。



(未同定)

## チュウガタスジシマドジョウ (ドジョウ科)

体長 雄 7 cm 雌 9 cm

京都府RDB:絶滅寸前種



流れのある泥質の場所で見つかります。絶滅危惧種に指定されていますが、木津川流域では、古川や防賀川などいろいろな場所で見つかります。シマドジョウ類に似ますが、体側の斑紋は線状です。スジシマドジョウ類は細分化が進み、現在、多数の種に分類されています。



## ウキゴリ (ハゼ亜目)

体長 10 cm  
京都府RDB:未掲載種



体長10cmほどで、頭が平べったく、口が大きいハゼ科の魚です。第1背ビレ後部に黒色と白色の斑紋があることが特徴です。京都府南部では、山間部から宇治川と木津川に流れ込む支川の河口でたまに採集されます。京都府南部では食用に用いられませんが、琵琶湖にいる近縁種のイサザは佃煮にして食されます。



## タウナギ (タウナギ科)

城陽市での俗称 カワヘビ

体長 40 cm  
京都府RDB:外来種



ウナギのように細長い魚ですが、黄色みが強く、胸ビレがありません。京都府南部の泥のある水路で見られます。空気呼吸をするため、水中から顔を出していることが時々あります。蛇みたいに見えますが、れっきとした魚です。口を膨らませ空気呼吸をすることと、雄が稚魚を口の中で保育をすることが報告されています(松本・岩田,1997)。



## ウツセミカジカ(小卵型) (カジカ科)

体長 10 cm  
京都府RDB:絶滅寸前種



ドンコに似ていますが、鱗がなく、胸鰭条数が14以上です。体長は大きいもので10cmほど、大きな頭に眼を中心とした放射状の様相が見られます。十数年前は、京都府内では、まったく見かけることのなかったウツセミカジカが、木津川で見つかるようになりました。河川レンジャーアドバイザー福井氏によると、複数個所で確認されているようです。木津川上流の三重県内では以前から確認されていたので、分布を広げているようです。



## カジカ(大卵型) (カジカ科)

体長 20 cm  
京都府RDB:未掲載種



頭が大きく、ドンコに似ていますが、鱗がありません。胸鰭条数が14以下で、支川の上流で見つければカジカ(大卵型)です。木津川には酷似するウツセミカジカ(小卵型)が見られます。カジカ(大卵型)は、宇治川の支川の上流で見つかります(林,未発表)。



## カダヤシ (カダヤシ科)

体長 雄 3 cm 雌 5 cm  
京都府RDB:外来種



カダヤシ(蚊絶やし)の名前のごとく、水路のボウフラ退治のため、放流されたようです。一見メダカ類によく似ていますが、やや大きく、尾ビレの形が違います。メダカ類の尾ビレは三角形なのに対し、カダヤシは丸いウチワ形です。雄の尻ビレも特徴的で、細長い棒状になっています。カダヤシは卵胎生で、子どもを産みます。2010年代に、城南菱創高校生が調べたところ、巨棕池の干拓田の水路には、ミナミメダカとカダヤシの両方が生息することが分かりました。



## オオクチバス (サンフィッシュ科)

体長 50 cm  
京都府RDB:外来種



口が大きく、海にいるスズキに似ています。体長50cmに達し、ルアー釣りの対象魚として人気があり、川・池・水路に侵入しています。体色は緑がかった黒色で、体側に不明瞭な黒っぽい縦帯が入ります。日本在来の生物を捕食し、重大な影響を与えるため、特定外来生物に指定されています。特定外来生物は、飼育や運搬、野外に放つこと、譲渡・売買に規制がかかります。



## ブルーギル (サンフィッシュ科)

体長 20 cm  
京都府RDB:外来種



ブルーギルとは、青いエラという意味で、目の下や口の周りが青緑色をしています。丸く平べったい10~20cmほどの魚で、ミズでもパンでも練餌でも簡単に釣ることができます。城南菱創高校生が調べたところ、ブルーギルの5%の個体のから、消化管につまった疑似餌(ワーム)を見つけました。釣り人が紛失された疑似餌を食べたもののだと思われます。疑似餌が消化も分解もされにくいことを改めて思い知りました。ブルーギルも特定外来生物に指定されています。



## コクチバス (サンフィッシュ科)

体長 50 cm  
京都府RDB:未掲載種



オオクチバスよりやや口が小さいことが名前の由来ですが、名前に反して肉食魚らしい大きな口です。体色は黄土色で、体側に不明瞭な横帯が複数入ります。2010年頃から京都府南部のあちこちで増えているようで、京都府南部におけるコクチバスの報告書や論文が複数見つかります。オオクチバス同様、特定外来生物に指定されています。



## ナマズ (ナマズ目)

体長 50 cm

京都RDB:未掲載種



初夏に水路でかわいらしい幼魚をたくさん見つけます。大きなナマズのひげは4本ですが、幼魚の時だけ6本あります。成魚の体長は、50cm ぐらいまでのものが多いですが、池で体長1m近い個体を採集したことがあります。宇治川と木津川にはさらに大きくなるピワコオオナマズもいます(中川,未発表)。



## アカザC.1 (ナマズ目)

体長 10 cm

京都RDB:絶滅危惧種



体長8cmほどの細長いナマズ目の魚です。口ひげが6本あり、胸ビレと背ビレが鋭く、毒をもち、刺されるとしばらく痛みます。アカザ類は体側の斑紋から2種類に分けられます(2016, 西村, webコンテンツ)。淀川水系個体は、赤褐色の体色に白い脱色斑のあるアカザC.1という型です。由良川や丹後半島に行くと、やや大きく、脱色斑の目立たないアカザC.2という型ばかりです。京都府南部では山間部の渓流域で見つかるのみです。



## チャネルキャットフィッシュ (ナマズ目)

体長 50 cm

京都RDB:外来種



小型の個体は、在来種のギギによく似ています。在来種のギギは、黄色をしています。チャネルキャットフィッシュは、白地で尻ビレが大きく、ヒレに赤い色が入ります。大きいものは1m近くなるようで、特定外来生物に指定され防除の対象になっています。京都府南部でも近年見かけるようになり、幼魚も採集されています。



## ギギ (ナマズ目)

城陽市での俗称 ハチナマズ

体長 20 cm前後

京都RDB:未掲載種



ナマズの仲間ですが、ひげが多く、色は黄色に黒いまだら模様で、体形もあまりナマズには似ていません。体長は大きいもので20cmを超えます。背ビレが尖っており、大きな脂ビレがあります。背ビレは硬く、うっかりすると手を切ってしまうので注意が必要です。捕まえると「ぎ〜ぎ〜」鳴きます。特定外来生物に指定されているチャネルキャットフィッシュ(アメリカナマズ)はこのギギによく似ています。



## ドンコ (ハゼ亜目)

体長 10 cm

京都府RDB:未掲載種



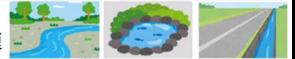
淡水産のずんぐりむっくりした魚を「どんこ」と呼ばれることが多いです。国内外来種のハゼ科ヌマチチブや希少な淡水カジカ類も「どんこ」と呼ばれます。ハゼ科の魚の多くは腹ビレが吸盤になりますが、ドンコは吸盤になりません。淡水カジカ類の仲間は鱗がありませんが、ドンコには鱗があります。体色は黄土色で黒い鞍状模様が入ります。肉食の底生魚で体長は15cmを超える個体も見つかります。美味しく、昔はよく食べられたそうです。



## シマヒレヨシノボリ (ハゼ亜目)

体長 4 cm

京都府RDB:未掲載種



カワヨシノボリに似ていますが、比べて顔が丸く、胸鰭条数が20以上です。小さい個体が多く流れの緩やかな水路やため池にいます。数は少なく、稀に木津川や水路で見つかる程度です。明仁上皇陛下は、ハゼ科魚類の研究をされています。2019年、京都御苑にいるヨシノボリ類が、ビワヨシノボリとシマヒレヨシノボリの野外交雑個体であると報告しています(明仁ほか,2019)。



## カワヨシノボリ (ハゼ亜目)

体長 6 cm

京都府RDB:未掲載種



京都府南部では、砂礫質の河川で、普通に見られるハゼ科の魚です。青谷川、古川、木津川でも見つかります。やや流れのあるところを好むようで、カワムツとともに採集されます。ヨシノボリ類もいろいろな種類がありますが、胸鰭条数が17以下であればカワヨシノボリです。京都府南部と奈良県北部におけるカワヨシノボリと他のヨシノボリの分布の詳細が報告されています(細谷,2005)。



## ヌマチチブ (ハゼ亜目)

体長 8 cm

京都府RDB:国内外来種



ヌマチチブは、本州の河川下流域に普通に見られるハゼです。それまで琵琶湖で確認されていなかったヌマチチブが、1989年に確認されました(高橋,1990)。その後、DNAが調べられ琵琶湖のヌマチチブは国内外来種であることが分かりました(向井・西田,2005)。さらに、嵯峨野高校生がDNAを調べた結果、宇治川、木津川下流、淀川水系にいるヌマチチブは、他の地域から持ち込まれた国内外来種であることが分かりました(嵯峨野高校生,2014)。



# 京都府南部魚類リスト

確認頻度：◎多い ○普通 △少ない ▲極希 \*過去の記録（聴取、文献・マスコミ記録）/◇近年の城陽で確認（聴取含む）

No.	科	標準和名	1990-2011 京都府 南部	標準和名	環境省(2020)カテゴリー	2018- 2023 京都府 南部	2021- 2023 城陽 市内
1	ヤツメウナギ科	カワヤツメ	*	カワヤツメ	絶滅危惧II類 (VU)		
2	ウナギ科	ニホンウナギ	△	ニホンウナギ	絶滅危惧IB類 (EN)	▲	◇
3	アユ科	アユ	◎	アユ	(一部放流)	◎	◇
4	サケ科	ニジマス	*	ニジマス	外来種	*	
5		アマゴ(放流)	*	アマゴ(放流)	天然は準絶滅危惧 (NT)	▲	
6	コイ科	ヤリタナゴ	▲	ヤリタナゴ	準絶滅危惧 (NT)	*	
7		カネヒラ	○	カネヒラ	(京都府RDB) 絶滅危惧種	○	◇
8		シロヒレタビラ	▲	シロヒレタビラ	絶滅危惧IB類 (EN)	*	
9		イチモンジタナゴ	▲	イチモンジタナゴ	絶滅危惧IA類 (CR)		
10		イタセンバラ	*	イタセンバラ	絶滅危惧IA類 (CR)		
11		タイリクバラタナゴ	◎	タイリクバラタナゴ	外来種	◎	◇
12		ムギツク	▲	ムギツク	-	▲	
13		カワヒガイ	▲	ヒガイ類	準絶滅危惧 (NT)	*	
14		-		カワバタモロコ	絶滅危惧IB類 (EN)	▲	
15		ツチフキ	△	ツチフキ	絶滅危惧IB類 (EN)		
16		カマツカ	○	カマツカ	-	◎	◇
17			○	ナガレカマツカ	-	△	
18		コウライニゴイ	△	コウライニゴイ	-	○	
19		ニゴイ	◎	ニゴイ類(未同定)	-		◇
20		ズナガニコイ	○	ズナガニコイ	(京都府RDB) 絶滅危惧種		
21		タモロコ	○	タモロコ	-	◎	◇
22		ホンモロコ	○	ホンモロコ	絶滅危惧IA類 (CR)		
23		コウライモロコ	△	スゴモロコ属	※絶滅危惧II類 (VU)	▲	
24		ゼゼラ	◎	ゼゼラ	絶滅危惧II類 (VU)	*	
25		ヨドゼゼラ	▲	ヨドゼゼラ	絶滅危惧IB類 (EN)	▲	◇
26		モツゴ	◎	モツゴ	-	◎	◇
27		アブラハヤ	△	アブラハヤ	(京都府RDB) 絶滅寸前種	▲	
28		タカハヤ	△	タカハヤ	-	△	
29		オイカワ	◎	オイカワ	-	◎	◇
30		カワムツ	◎	カワムツ	-	◎	◇
31		スمامツ	○	スمامツ	(京都府RDB) 準絶滅危惧種	△	◇
32		ハス	○	ハス	絶滅危惧II類 (VU)	▲	
33		ワタカ	▲	ワタカ	絶滅危惧IA類 (CR)		
34		ギンブナ	◎	ギンブナ(未同定含む)	-	◎	◇
35		ゲンゴロウブナ	◎	ゲンゴロウブナ	絶滅危惧IB類 (EN)	△	
36		コイ	◎	コイ(型不明)	※地域個体群 (LP)	◎	◇
37		ソウギョ	▲	ソウギョ	外来種		
38		ハクレン	*	ハクレン	外来種		
39	ドジョウ科	アユモドキ	*	アユモドキ	絶滅危惧IA類 (CR)		
40		ドジョウ	◎	ドジョウ中国産	-	◎	◇
41				ドジョウ在来	準絶滅危惧 (NT)	▲	◇
42		-		ホトケドジョウ	絶滅危惧IB類 (EN)	*	
43		シマドジョウ	△	オオシマドジョウ	-	◎	◇
44				ニシシマドジョウ	-	▲	
45	スジシマドジョウ	▲	チュウガタスジシマドジョウ	絶滅危惧II類 (VU)	△	◇	
46	ナマズ目	ナマズ	○	ナマズ	-	○	◇
47		-		アカザC.1	絶滅危惧II類 (VU)	△	
48		ビワコオオナマズ	*	ビワコオオナマズ	-	*	
49		-		チャネルキャットフィッシュ	特定外来生物	▲	
50		ギギ	○	ギギ	-	○	◇
51	メダカ科	ミナミメダカ	◎	ミナミメダカ	絶滅危惧II類 (VU)	◎	◇
52	カダヤシ科	カダヤシ	◎	カダヤシ	特定外来生物	◎	◇
53	サンフィッシュ科	オオクチバス	◎	オオクチバス	特定外来生物	◎	◇
54		-		コクチバス	特定外来生物	△	◇
55		ブルーギル	◎	ブルーギル	特定外来生物	◎	◇
56	ハゼ亜目	ドンコ	◎	ドンコ	-	◎	◇
57		トウヨシノボリ	○	トウヨシノボリ(未同定)	-	▲	
58			○	シマヒレヨシノボリ	準絶滅危惧 (NT)	△	◇
59		カワヨシノボリ	◎	カワヨシノボリ	-	◎	◇
60		ヌマチチブ	○	ヌマチチブ	国内外来種	◎	◇
61	-		ウキゴリ	-	▲		
62	タイワンドジョウ科	カムルチー	○	カムルチー	外来種	▲	
63	タウナギ科	タウナギ	◎	タウナギ	-	○	◇
64	ボラ科	ボラ	△	ボラ	-		
65	カジカ科	-		ウツセミカジカ(小卵型)	絶滅危惧IB類 (EN)	△	◇
66		-		カジカ(大卵型)	準絶滅危惧 (NT)	▲	

## この冊子の見方について

### ■生息場所の表示について ※魚が見られる場所をイラストで表示しています。



### ■大きさの表記について

この冊子で掲載している魚は、体長表記(口の先から尾ビレの付け根までの長さ)をしています。  
※全長とは、口の先から尾ビレの端までの長さの事です。



### ■城陽市魚類リストについて

城陽市では、木津川水系を中心とした淡水魚の記録は、過去40年間で聴取記録を含め48種類が文献資料として残っています。1990年以降現在まで、イタセンパラの発見やボラの遡上、メダカの復活と共にヌマチチブなど新たな外来魚の侵入があり、近年の分類法による新たな種の登録による追加で66種類となった淡水魚リストを公表し、観察の資料としました。

### ■京都府レッドデータブック 2015(京都府 RDB)について

京都府内における絶滅のおそれのある野生動物種や緊急に保護を要する地形・地質・自然現象、学術の上重要な自然体系について掲載したデータブックです。

## 参考資料・掲載写真について

このガイドブックに掲載している写真と情報は、次の方々より提供いただきました。  
※写真は京都府南部の魚を中心に、一部、近隣や水族館にて撮影したのも含まれます。

- ・木津川漁業協同組合
- ・宇治川漁業協同組合
- ・京都水族館前館長 下村実  
(四国水族館現飼育部長)
- ・木津川出張所管内河川レンジャー  
山村元秀
- ・同河川レンジャーアドバイザー 福井波恵
- ・琵琶湖博物館 特別研究員 中井克樹

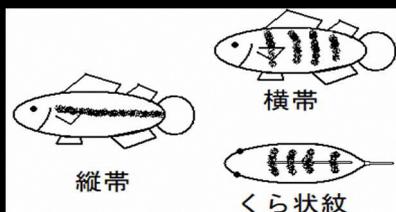
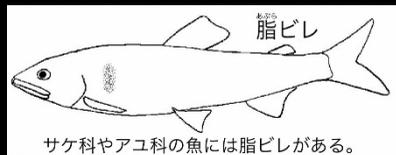
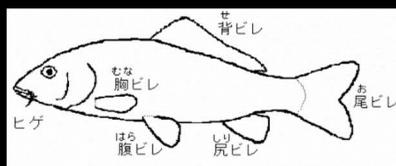
- ・びわこベース 代表 関慎太郎
- ・湖北野鳥センター 専門員 植田潤
- ・人と自然の博物館 地域研究員  
脇坂英弥
- ・環境生物研究会  
林博之、中川宗孝、水野尚之  
野村隆俊、福井惇一
- ・京都府立菟道高等学校 科学部

※本書の内容について、無断転載・複製を禁じます。

## 魚の見分け方

魚の見分け方は、模様とヒレをしっかり見ることに始まります。近年、細分化が進み、採集した現地で見分けることは困難です。写真を撮ったり標本を残したりし、外部形態や色の確認のほか、ヒレ位置やヒゲの長さ、ヒレの条数（鱗条と呼ばれるヒレのスジの数）、鱗の特徴を調べる必要があります。中には、DNAを調べないと見分けることができないものもあります。

魚の縦と横は一見すると逆です。頭を上、尾ビレを下にして考えます。



## 川遊びで注意すること

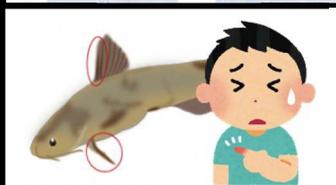
### ①必ず大人と一緒に行きましょう。

くろぶしを上回る泥に足を取られると、動けなくなります。川には深い場所と浅い場所があります。ひざを超える深さの場所であれば、溺れる可能性があります。



### ②魚をつかむときは気をつけよう。

ナマズ目のギギやアカザ類などの魚に刺されるとしばらく痛みが続きます。ブルーギルやバス類もヒレのトゲが固く、うっかりするとケガをすることがあります。ウナギの粘液は、目に入ると危険です。魚とりは汗をかきますが、汚れた手で目をこすらないようにしましょう。



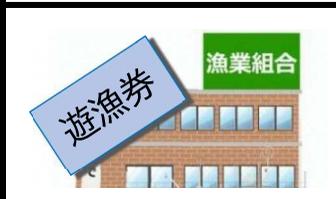
### ③魚を逃がさないようにしましょう。

ミナミメダカやバラタナゴは、近縁種が放流されることにより遺伝子のかく乱が起きてしまいました。ブルーギルやバス類は、本来生息している魚を食べつくしてしまいます。昔見なかったヌマチチブが京都府南部のいたるところで見られます。



### ④河川で遊ぶ場合、遊漁券が必要な場合があります。

アユやマス類が放流されている場所では、遊漁券を購入して釣りを楽しむ方が大勢います。



発行：2023年（令和5年）6月24日

協力：環境生物研究会 林 博之、中川 宗孝、水野 尚之

製作：城環環境パートナーシップ会議(E-mail:kankyo@city.joyo.lg.jp)